

皆さん、アミタ株式会社認証チームの小川です。本日は、実際に岩泉町でどのような森林管理をしているか、第三者の視点からということでお話します。

## 岩泉町と、自然環境の概要

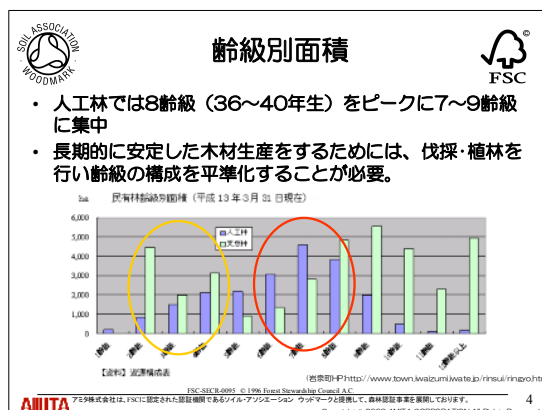
伊達岩泉町長からお話がありましたが、岩泉町は本州で一番広い町です。3本の大きな川があり、そのほぼ全体が山に覆われ、本当に平地が少ないことが航空写真からもわかります。この森林全体をどのように管理していくかを考えるために、森林認証に取り組まれたと聞いています。

岩泉町は、実に町の93%を森林が占め、その大部分が広葉樹林です。木材が製紙用のチップとして利用されたり、木炭生産もまだまだ盛んな地域で、シイタケなども多く生産されています。

豊かな自然が残る森林が、自然公園や国立公園に指定され、また龍泉洞も非常に有名で、多くの観光客が訪れます。

人工林ではアカマツやカラマツが植えられていますが、日本の他の地域と同じく、その大部分が昭和30年代～40年代に植林されたものです。

林齢の構成ですが、青い部分がアカマツやカラマツなどの人工林、薄い緑色の部分が天然林を表しています。7～9齢級に集中していますので、長期的に安定したカラマツ、アカマツの利用を考えるうえで、この部分をどうするのが課題としてあるでしょう。広葉樹林について見てみますと、チップや木炭の生産に使われるため、5～6齢級が少なくなり、使われた後の2～4齢級の若い木が多くなっております。



## FSC 認証への岩泉町の取り組み

次に岩泉町が、FSCの森林管理認証をどのように進めてこられたか、簡単にお話ししたいと思います。認証への取り組み開始は非常に早く、2002年に準備を開始しました。2002年の11月に事前審査を実施、その結果を受けて何点かを改善していただいた後、2003年5月に本審査を実施しました。結果2003年9月9日に認証を取得、国内で8番目の認証取得林になりました。町有林を主体に、大川財産区有林と株式会社吉本の社有林という3者によるグループ認証でした。グループ認証は小・中規模の所有者が幾つか集まって取得することが多いなか、比較的大きなところが三組織だけ集まるというのは、初めてのケースでした。昨年、三菱製紙の社有林とその関連会社である北菱林産の社有林もグループに加わり、現在5者がメンバーになっています。面積は合計で約6,000ヘクタール、国内の認証林の中でもかなり大きな面積です。

ここで少しだけ、FSCの概要について述べておきますが、FSC森林認証制度は、森林そのものを認証する森林管理認証と、そこから出てきた木材を非認証の木材ときちんと分けて加工するというCoC認証とに分かれます。CoC認証を取得されたところで生産された物に、FSCのロゴマークを付けることで、購入代金として元の森林に還元されるという、消費者の立場から適切な森林管理が推進できる制度です。



FSCはまた、社会、環境、経済の3つを柱とした制度で、それが10の原則にまとめられています。

### 広葉樹に富む、岩泉町のFSC認証林

国内の認証林の大多数がスギやヒノキまたはカラマツといった人工林という中であって、岩泉町のFSC認証林は、広葉樹がその大部分を占めることが大きな特徴です。当初、人工林からカラマツなどの木材があまり生産されず、認証における課題でありましたが、現在国内の製紙用チップの需要が伸びており、こうした広葉樹の二次林でのチップ利用が進んでいます。

木炭生産についても、生産者の組合がCoCのグループ認証を取得され、認証林から出た広葉樹を木炭にし、認証木炭として販売しています。認証木炭の生産と販売に着手したのは、岩泉町が初めてです。カラマツの利用では、株式会社吉本が戦後、カラマツ造林を積極的に進めてこられ、自社工場でCoC認証を取得、現在も認証林から出るカラマツ材を製材しています。伐採後にも植林をすとか、道路沿いにはカラマツを植えずに広葉樹の自然の植生に戻していくといった環境に配慮した森づくりも実施しています。

広大に広がる広葉樹に加えて、多様な林産物の利用が考えられているのも大きな特徴です。例えば、林床での葉ワサビ栽培とか、ウルシの生産があります。町有林にはアカマツ林があり、全国的にも有名なマツタケ産地になっており、高品質なマツタケを産出しています。

また、セラピーロードと称して「癒しの森」つまり、ここを歩いて体の不調を治してもらおうといった取り組みもされていますが、正式にセラピーロードとの認定を受けています。早坂高原の利用や溪流での釣りも盛んです。「龍泉洞の水」は、東京の百貨店などで販売されています。

認証林の管理としては、どの認証林にも当てはまることではありますが、生態系保護区の設置や、貴重種の保護など自然を守る活動が含まれています。もともとが広い広葉樹な

ため、わざわざ生態系保護区を設置しなくてもよいのですが、近年の製紙用チップの増加とか木炭利用もあり、そのような活動に利用する部分と、利用せずに厳正に保護する部分とを分けて管理しています。

バッファゾーンすなわち緩衝地帯は、先ほど話したような河川沿いなどに設けています。河川沿いは生態的にも非常に重要な部分と言われ、陸地と水が接するところなので、陸地からの養分供給の場所にもなっていますし、土砂流出の防止などの機能も果たします。そうした意味で、河川沿いは人工林にせず徐々に自然の広葉樹に戻していき、保護することが求められており、その形成に取り組んでいるわけです。

植物性のチェーンソーオイルの使用も生態系保護につながります。

また、岩手大学とか岩手県立大学により、こういった広葉樹林の中で様々な調査も行われ、調査結果が森林管理に反映されています。

### 今後の課題ーより多面的な広葉樹林の活用を


次にもう少し具体的に、審査の際に指摘された事項と、それに対する改善についてお話しします。審査の際、100%認証基準を満たしている例はまずありません。たいていは何か、改善が必要な点が指摘され、条件付きで認証されるか、そこまでいかないまでも、改善が望ましいという意味で、推奨事項が出されます。条件付きの場合は改善までの期限があります。推奨事項では特に改善までの期限はありませんが、取り組むのが望ましい事項として出されます。

審査の結果岩泉町では、7つの条件と17の推奨事項が出されたうえで、認証取得となりました。他の認証林と比べると若干多くの指摘です。指摘内容の例としては、安全装備の改善、中長期の具体的な計画の作成、森林資源調査に基づいた森林簿の更新、あとはスギ林やアカマツ林の具体的な管理についての方針作成だとか、間伐材など多様な林産物の利用、地域社会の積極的な関わりなどがありました。広大な広葉樹林を保有しているため、認証の取得に際して、広葉樹林やスギ、アカマツ林を将来どのように管理し、どういう風に生かしていくのかが若干あいまいで、具体的な計画や管理方針の作成などが条件になりました。また、地域社会が森を管理していくため、地域が具体的にどう森林管理に関わっていくのかも掘り下げてほしいということで、条件が出されました。


では、どんな点が改善されたのでしょうか。例えば安全装備の改善です。本審査の際は、ヘルメットや作業服、ゴーグルや普通の地下足袋と、日本全体の標準として普通の装備が使われていましたが、ILO（国際労働機関）の求める、より高い安全管理基準があります。FSCも国際基準なので、ILOのガイドラインに基づいた安全装備に改善すべきという条件が出されました。現在はそれを受け、チェーンソーが当たっても破れずけがをしないような前掛けをつけるとか、足をガードするために安全脚絆を導入するといった取り組みがなされています。ILOの基準を完全に満たすにはさらなる改善が必要ですが、長年使ってきた服装を変えると、実際作業される方からは嫌がられます。しかし慣れるためには、最初

使えなくても継続して利用してもらうことが必要ですから、継続利用が徹底されているかどうか、管理者がそれを確認しているかどうかも見られます。

次に中長期の具体的計画として、本審査の際欠けていた、方針通りの森作りをするための具体的手順、まず、将来にどこが実際に利用可能かを洗い出し、例えば全体に一律に管理するのではなく、利用する場所と保全する場所を明確にし、偏っている森林の年齢構成を平準化するため、毎年安定的な木材の生産ができる態勢に持っていく取り組みをしています。まだ初期段階なため、そのシミュレーションを実施したところです。広葉樹林については、製紙用チップとして生産する計画が具体的に作成されています。



### 中長期の具体的計画




**本審査時（2003年）**

- ・ 中長期にわたりどのような森林を形成し収穫していくのかという具体的計画がなかった。町有林の広葉樹は利用予定がなかった。

**現在**

- ・ 将来的に収穫可能な面積を算出し、林齢公正を平準化に近づけるためのシミュレーションを実施。広葉樹を製紙用チップとして生産する計画。



FSC-SEK-COC-001 © 1996 Forest Stewardship Council A.C.

アミタ株式会社は、FSCに認定された認証機関であるフイル・アングス・コン・ワットラー・アソシエーションを通じて、森林認証事業を営んでいます。

Copyright © 2008 AMITA CORPORATION All Rights Reserved. 18

それから森林簿という、実際どこにどんな森林がどのくらいあるかを示した帳簿がありますが、本審査の際は標準的な収穫表つまり、樹種や土地の条件などから自動的に算出する形式の収穫表を使用して森林簿を作成していました。しかし岩泉町の森林が本当にそういう状況になるかどうかは確かめられていないので、条件として指摘されました。その改善のため、2000ヶ所近くという、他の認証林と比べても非常に多い地点で森林の資源調査を実施し、データを現在取りまとめ中です。

間伐材や多様な林産物の利用については、多様な林産物の利用をより有効に生かしていただきたいということで出されました。今までなかなか利用されなかった間伐材も含め、サポーター制度の中で利用されるようになってきています。

このように、FSCの本審査の時点では、認証の最低ラインは満たしているものの、まだ幾つか改善点がある状態でしたが、様々な条件や推奨事項に対応し、改善していくなかで、森林管理のレベルが上がってきています。まだまだ様々な課題もありますが、取り組みをさらに進めてより高いレベルの森林管理に引き上げつつあります。

最後になりましたが、より高いレベルの森林管理のためには、先ほど申し上げた安全装備を万全にし徹底することや、どこかの森林でいつごろ木を切りどのように木材を生産するのかといった中長期の具体的な計画、どのような利用の仕方をしていくのかの計画が必要です。また、森林調査もデータを取りまとめ中ということですが、それを確実に森林簿に反映する必要もあります。

繰り返しになりますが、岩泉町の森林の特徴は豊かな自然、豊かな広葉樹林ですから、この広葉樹林をより一層多面的に利用することを検討し実行するのが、森林認証を発展させるための大きな特徴になっていくと考えています。以上、ご清聴ありがとうございました。